

生乳の需給等に係る情報交換会（第8回）議事概要

開催日時：令和6年11月8日（金）15:00～17:00

開催場所：対面・web 会議

出席者：別添参照

議事概要：

資料に基づき、農林水産省から、①生乳取扱量等の見込み、②飲用牛乳の価格構造について、Jミルクから、酪農乳業乳製品在庫調整特別対策事業と新たな需給対応の仕組みについて、説明し、それを踏まえた出席者からの意見の概要は以下のとおり。

（1）生乳取扱量等の見込み（年末年始の需給対応）

（関東生乳販連）年末年始の需給は、前年よりも厳しい状況であると認識。具体的な対応は乳業とも協議をしている。

（ホクレン）道外移出生乳量については、前年を下回っている。年末年始の加工処理量について資料に令和3年度処理量を下回る予測とあるが、令和3年度は、需給が大幅に緩和する中、乳業にも多大に協力いただいた上での実績。この先の生乳生産量が、前年を上回る推移を見込んでおり、前年よりも処理は厳しくなるので楽観視できない。

（東海酪連）年末年始にはかなりの加工向けがでる見込み。加工工場の調整だけではなく、ローリーの確保も課題。生産量が減っているので、前年ほどではないと見込んでいるが、飲用需要次第では緩和感が強まる。

（北陸酪連）年末年始の加工は、域内に施設がないので、域外の乳業にお願いすることになるが、少しでも域内で（飲用等向けで）処理できるよう乳業者と調整中。

（近畿生乳販連）年末年始の余乳は前年と同様、九州の乳業に持ち込むことになるのではと危惧。タンクのやり繰りやトレーラーの確保、委託加工の調整等も必要。西日本の需給については定期的に情報共有する必要。

（中国生乳販連）ここ数年、不需要期の余乳処理量が増えている。不需要期には全国連を通じて関西に生乳を持ち込んでいたが、最近では九州の乳業で余乳処理をしている。今年の年末年始も前年並みの余乳が発生する見込みで車の手配等に対応したい。

（四国生乳販連）飲用需要が良くないので、年末年始は前年と同程度の余乳処理を見込んでいる。域内で処理できる量以上は全国連と連携して対応する。

（沖縄県酪）生産量が足りず、九州から生乳を移入しているし、学校給食にも一部乳飲料を供給している状況。

（MMJ）年末年始に向けて自社加工工場をフル稼働することを目指して調整を進めている。

- (ちえのわ) 1年間固定量で契約している。今年は生産量が伸びておらず、余乳処理のためバターと練乳向けに生乳が供給できるか分からない状況。
- (ループライズ) 生産者とは1年間固定量で契約。通年で価格も安定したままで出荷を行う予定。
- (ミルクネット) これから需要は落ちていく中で、分娩ズレによる乳量増が見込まれ、年末年始は例年以上に余乳が増える見込み。しかし、加工処理を依頼できるところがないため、対応を検討したい。生産者と協力して生産量を抑える対応を考えているが、それで不十分な場合はスーパーに特売をお願いすることも検討。
- (サツラク) 道内では通常の価格帯での販売が多少伸びているが、ディスカウントストアの出店攻勢があるため、価格競争に懸念。年末年始は、余乳は凍結生乳や脱脂濃縮乳にする予定。
- (カネカ) 年末年始は、自社のバター工場で余乳処理する予定。

(2) 飲用牛乳の価格構造

(乳業協会)

- ・牛乳の価格帯分布については、小売価格への転嫁は進んだものの、低価格帯商品や乳飲料等へ需要がシフト。高価格帯の商品は物量として苦戦。インバウンドの影響や値ごろ感から200mL、500mLの売上本数が好調。
- ・大手乳業は、本社経費、宣伝広告費、研究開発費、社員教育費等の経費を負担。物流費についても、複数工場を保有し生産品目が異なる場合、物流拠点の設置が必要となるなど、規模によって負担するコストが異なる。
- ・取引乳価については、乳業者として安全かつ適切な乳量を確保するため安定した取引を望む。スポット的に乳価が極端に安いものの取引が発生することが皆無ではないかもしれないが、生産者における再生産確保の面から見ても、定期的に行われているとは考えづらい。
- ・小売段階での価格構造については、センターフィーについて量販店により異なり、同一量販店でもNBかPBかでも差がある事がある。
センターフィーは売上物量ではなく売上金額に対して生じるため、売り上げ単価の高いものが、より一層高くなる。

(ちえのわ) 小売業者も店舗を沢山持とうとすると物流センターが必要になるが、コストがかからないように工夫をしているところもある。運賃の値上げを我々が飲み込むと、生産者の手取乳価が下がるので、取引先に対して運賃の値上げは小売価格に載せるようお願いしている。

(MMJ) 店舗で安売りされているのを見ると悲しくなるという生産者の声を聞く。価格だけを打ち出した製品ではなく、生産背景なども含めて理解いただいた上で、商品設計と一緒に考えていくことを心がけている。昨今川下からの生産者への目線が多くなっていると感じているので、生産者を大事にしながらより安定供給や良いものを店頭に並べていきたい。

(3) 酪農乳業乳製品在庫調整特別対策事業と新たな需給対応の仕組み

(農水省) 需給の問題は椅子取りゲーム。全国的な課題に対して、全国的観点での取組にあらゆる事業者が参画していくことが必要。

(MMJ) それぞれが取り組める自由度が大事。それぞれでがんばれるようなシステムを考えていただけるとありがたい。

(ちえのわ) 余った生乳をどうしようかではなく、どうやって消費を増やすのかを考えるべき。当社では、教育ファーム通じて食育が重要だという取組を行っている。

(ループライズ) 生産者の立場で言えば、指定団体にも系統外にも出しているので、この仕組みはわからないでもない。輸出も念頭に議論した方がいいのでは。

(サツラク) 全国協調については権利と義務の問題。乳業としては売る努力をしているが、安定的に生乳を供給しつつ生乳を売り切る義務があるので、全国協調は大事。

(Jミルク) 需要拡大は当然既に取り組んでいる。その上で、何らかの需給の異変が起きた場合に、生乳生産に影響がでないようにするための取組であることを理解いただきたい。

以上